

インドネシア ▶ 菜園クラスと栄養教育で母子の栄養改善を目指しています

PHJ はバンテン州セラン県にあるティルタヤサ自治区の村で、栄養改善活動を実施しています。都市部から離れた村では、毎日新鮮な野菜を購入する事が困難という問題があります。昨年から引き続き、村主体で運営管理する菜園をサポートすると共に、今年度からは2つの新たな取り組みを始めています。

1つ目の取り組みは、1月より開講して行っている家庭菜園クラスです。これは、気軽に自宅でも家庭菜園が普及するように、ヤル気のある村人へ菜園作りの講習を行うというものです。講習は2部構成で、1部の基礎編で土壌の事を学び、2部は栽培の実践について詳しく学べるようになっていきます。講師はケブユタン村在住、あちこちで教えているベテランで、重要なポイントに絞って分かり易く教えています。各村で男女併せて30名前後の受講者があり、大好評で皆熱心に講義に聞き入っていると報告されています。講習は毎週行われ、13村全部の講習が終了するまでに約半年かかります。講習完了後に参加者の中から、実際に家庭で野菜栽培を実践する者が多数出て欲しいと期待しています。



菜園クラスで講師から学んでいる参加者

2つ目の取り組みは、ティルタヤサ自治区の栄養担当

の助産師によるボランティアへの栄養教育講習です。こちらも全2回の2部構成で、2回の講習を通じて栄養の基礎知識を学んで貰い、その知識が各村でお母さん達等の村民へ浸透する事を目標とし、教える技術も学べる内容となっています。講習内容の理解度を知る為に、講習前後に簡単なテストを行い確認を行っています。全体的に講習後は理解度向上の結果も見られており、引き続き行われるボランティアによるお母さん達への講習内容にも期待がもてます。その際にはより分かり易く実践的な内容になるようにと、PHJ が作成しボランティアへ配布したメニュー本を活用すると共に、栄養のあるそして簡単に作れる料理のレシピカードも作成して利用していく予定です。



助産師による栄養教育

この活動は味の素株式会社様のご支援により、3年前より実施している「栄養改善活動」の一環として実施しているもので、こうして普及していった菜園そして栄養の知識・技術が母子の栄養改善に繋がり、食を通じた健康的なライフスタイルの定着に結び付けばと考えて支援を行っています。

インドネシア事務所 柳瀬 美子

ミャンマー ▶ 事業開始に向けて準備を進めています

PHJ は2014年8月ネピドー特別区内のタコン・タウンシップ(ミャンマーの行政区画で郡にあたる)の支援を行うという事業合意書をミャンマー保健省と締結しました。2015年1月からPHJ ミャンマーの事業開始に向けて準備を行っています。

ミャンマーでの活動はPHJにとって初めての経験で、ゼロからの事務所立ち上げの過程では、活動地でのルールや規制に、驚くことも多くありました。活動地であるネピドーでは外国人の居住や物件の契約等が制限されており、当初契約を予定していた物件での事務所開設が困難となり、外国人の居住及び事務所の設置が許可されているホテルの一室を借りることで、ミャンマー事務所を開設することになりました。事務所での活動は始まったばかりであり、移動手段である車、バイクの確保、ミャンマー人スタッフの採用などを準備している段階ですが、できるだけ早く計画している母子保健環境改善事業を開始するべく、鋭意準備を進めています。

ここまでの活動として、PHJ に寄贈頂いた救急車をタコン郡病院へ届け



ミャウミャイ地域保健センター

るために、日本側からの輸送の準備を進めてきました。寄贈救急車は、熊本を出発し、博多港を経てヤンゴン港に到着し、寄贈予定地へ輸送されます*。

今後の活動として、現地スタッフを採用後、タコン郡における現地住民の出産状況に関わる現地調査・医療施設建設支援として、タコン郡アレーション村のサブセンター建設を予定しています。

ミャンマーというPHJにとっては今までとはまた違った環境での新規事務所の立ち上げは、困難な状況の連続ではありますが、活動地の母子保健環境の改善を目指し、PHJ ミャンマーの活動を進めていきたいと思っています。



タコン郡保健局事務所

ミャンマー事務所 真貝 祐一

*この輸送に関し、JapanGiving で募金を実施しています。JapanGiving はオンラインファンディングによりNPOの活動資金を集めており、PHJ は今回、救急車の輸送費用の支援を募っています。是非、皆様のご協力をお願いいたします。(右記 URL から寄付できます。http://japangiving.jp/p/129)

昨年10月より開始した「コンポンチャム州での事業」(以下現事業)ですが、「コンポントム州での事業」(以下前事業)に引き続き、住民に最も近い公的医療機関である保健センターに焦点を当て、母子保健支援を実施しています。現事業は前事業と大きく異なる点があります。それは、事業開始当初より保健センターの活動を管理・監督する立場にある保健行政区スタッフと協働して、事業マネジメント、会議運営、情報収集と分析を行うという点です。

カンボジアの保健行政区画は、州、保健行政区、保健センターに分かれています。前事業では、PHJスタッフが主体となって事業を実施していましたが、現事業では、保健行政区とパートナーを組み、保健行政区が主体となって事業を実施できるよう支援します。例えば、前事業ではPHJ内部で実施してきた保健センターに対する定期的なモニタリング評価を現事業では事業開始当初より保健行政区と協働して実施していきます。また対象となる保健行政区は2014年から新たに設立されており、運営能力強化が必要とされています。本来、保健センターの管理・監督は保健行政区の仕事であること、また、事業終了後の持続性も考慮し、このような新しい試みを取り入れることとなりました。

ネットワーク強化の第一段階として、保健行政区スタ

ッフ及び保健センタースタッフを対象にファシリテーションスキル・トレーニングを実施しました。保健行政区スタッフと保健センター長とのネットワーク会議の際に会議を円滑に進めたり、保健センタースタッフに対するトレーニングの際に研修を円滑に行うために必要なファシリテーションスキルを外部コンサルタントに依頼し、実施しました。ファシリテーションの定義、模範的なファシリテーターの役割と責任、様々な場面におけるファシリテーション術等について学びました。当研修で学んだファシリテーションスキルを今後の事業で参加者全員に生かしてもらいたいと考えています。



ファシリテーションスキル・トレーニングの様子。講師(写真中央)の説明を聞く参加者



グループで話し合いを行う参加者

このように事業終了後を見据え、事業開始当初より保健行政区が主体となって保健センターの活動を管理・監督できるよう保健行政区スタッフと協働して事業を推進していきます。カンボジア事務所所長 市原 和子

当事業は外務省の補助金を得て2013年8月～2016年7月の3カ年事業として実施しています。

チェンマイ県にある18校の高等専門学校(以下高専)の学生(14～19歳)を対象に、HIVに対する意識を啓発し、予防スキルの取得を促すことで青少年のHIV感染減少を目標としています。

第1期(2013年8月～2014年7月)では、6校の高専にて121名のピアエデュケーター(PE)を育成し、各校3回ずつ計18回のピア教育を行いました。全学生の22%にあたる3,170名が参加し、HIVに関する知識を習得しました。また、世界エイズデーなどの大きなイベントの際にも合計7回の特別キャンペーンを実施し、合計1,850名が参加しました。

その他の活動としては、学生130名に対して匿名でのHIVの抗体検査を行い、各高専には「ピア教育ルーム」を開設しました。学生が性に関わる悩みを相談できるカウンセリングルームとして、またPE間の打ち合わせに使用できる場所を提供しました。

また、PEが卒業した後も、継続してピア教育が実施されるよう後輩PE合計122名の育成研修も実施し、事業の継続性を確保しています。

第1期事業終了時に学生240名に対して行った調査の結果、以下のような成果が表れました。

	ピア教育受講者120名	ピア教育非受講者120名
HIVに関する知識と予防意識を測るテストの平均点	93点	62点
直近の6か月以内に性交渉を持った学生の人数	67名	60名
特定のパートナーとのみ性交渉をした割合	91%(67名中)	33%(60名中)
直近の性交渉時に実際にコンドームを使用した割合	96%(67名中)	23%(60名中)

これらの結果から、ピア教育によって学生はHIVに関する知識と予防意識を獲得し、感染予防に関する行動を取るようになったと考えています。

また、ジャルワン氏(シータナ商業高等専門学校職員)からは「この事業は、当学校の教育方針にも合致するものであり、HIV感染予防教育を行う上でもとても有意義だと考えています。当初は不安もありましたが、世界エイズデーやバレンタインデーのイベントの際に学生自身が特別キャンペーンを実施出来るようになるなど、今では学生が主体となって活動を行えるようになり、とても信頼しています。また、PEに加え、後輩PEの2世代の学生を育成して頂いたことは継続性の面でも安心してしています。PHJのスタッフの方々には本当に感謝しています。」との感想を頂きました。



ピアエデュケーター育成研修の様子



感染拡大ゲーム

タイ事務所所長
ジラナン・モンコンディー

東日本大震災復興支援

震災発生から4年が経ち少しずつ関心も薄れてきているようですが、被災地を訪れる度に復興が進んでいるところと遅れているところの落差が目立つように感じます。PHJはこれまで気仙沼、石巻、多賀城を中心に復興支援活動を続けておりますが今回は石巻支援の現況についてご報告します。

石巻は東日本大震災で特に甚大な被害を受けた地域で行方不明者を含めて4,000名以上の命が失われました。PHJが支援を続けている石巻市立病院開成仮診療所前の仮設住宅には石巻全地域から被災者が集まり、現在も約1,000名の方が入居されております。中には地震で奥様を亡くしお一人になられた方、震災後身体を壊された方等もおられ健康面での心配が増えております。

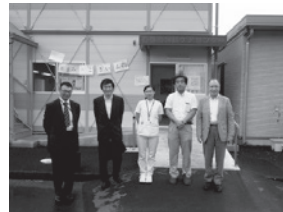
そこで石巻市では石巻市立病院開成仮診療所に隣接して開成包括ケアセンターを昨年オープンさせました。同センターには医師、理学療法士、保健師、社会福祉士等が勤務し、被災者の心身のケアと共に地域コミュニティの形成に日夜努力されております。PHJは2012年11月、開成仮診療所にドクターカーと医療機器を寄贈しましたが、今年の春には同センターに車両と

リハビリ用機器を寄贈する予定です。PHJは石巻で引き続き健康づくりの支援が出来ることを喜んでおります。

2011年3月15日から2014年12月31日までの東日本大震災寄付金

単位(万円)

収入	現金寄付	12,876
	物品寄付(医療機器・事務機等)	20,677
支出	医師派遣費・医療機器調達費	9,853
	物品支援(医療機器・事務機等)	20,677
	輸送費・スタッフ活動費	2,447
残額	復興支援に使う予定	576



開成包括ケアセンター



寄贈される車両

東京事務所 横尾 勝

PHJが開催している「就活カフェ」とは?

「就活カフェ」とは、学生や社会人向けに国際協力分野での就職・転職に関する指南をするPHJ主催のイベントです。PHJのような国際協力NGOは数が少なく、就活生や転職を考えている社会人にとっては、そもそもNGOを「知る」機会がありません。また、国際協力でのキャリアの積み方は人によってまるで違い、学生にとっては雲をつかむような話だったり、敷居が高く思われがちです。

そこで就活カフェというイベントを通して、国際協力の現場で働いている海外駐在員や開発コンサルタントなどから具体的なキャリアの話の聞いたり、どのような仕事をしているかといったことを気軽に見聞きできる場を提供するために企画しました。またPHJとしても国内の人たちの国際協力やNGOに対する関心や意見をうかがえる貴重な時間でもあります。

これまで開催した就活カフェは3回。2014年9月の1回目は「研究員、開発コンサル、学生の3人の就活ストーリー」、2回目は12月に「企業経由で国際協力NGOへGO!」、3回目は2015年3月に「国際協力が必要になるコミュニケーションスキルとは?」というテーマで実施しました。スピーカーにはPHJスタッフだけでなく外部のNGOや団体の方もお呼びして、どのような経緯で現在の仕事に就いたか、そして今はどのような仕事をしているかなど、これまでの具体的なキャリアを話していただきました。その後スピーカーの方を参加者が囲んで自



第3回目

由に質問ができるように、1時間ほど交流の時間を設けました。

参加者の方の大学生の中にはすでにキャリアプランが明確に見えている方もいれば、なんとなくNGOに入りたいといった漠然とした思いを持っている方など様々。また社会人の方も数名が参加していただきました。またテーマによって就活だけでなく転活(転職活動)にも役立つイベントになりそうです。

こうしたイベントに足を運んでくださるだけあって、どの参加者も熱心で、終了時間を過ぎても質問が終わらないといったこともありました。

今後もさまざまな観点で仕事やキャリアについて考える就活カフェを開催する予定です。

ホームページなどでお知らせしますので、ご興味のある方ぜひいらしてください。



第1回目



第2回目

東京事務所 南部 道子

「一期一会」

拓殖大学 国際学部 国際協力コース4学年 永山 日菜

私の学生生活を一言で表すなら「出会い」という言葉が当てはまる。振り返ると、たくさんの素晴らしい一生に一度の出会いがあった。私がPHJと出会ったのは2年生の夏、単身留学先のインドネシア。語学学校で出会った、現地で協力活動をしているという日本人女性にインターンを勧められたのだ。日本に帰国して、PHJがインドネシアで活動していることを知り、インターンの申込みをした。PHJでのインターンの仕事は、資料の翻訳や、記事の作成、イベントの企画・運営などの広報活動と多岐にわたったが、スタッフの方々は、大学生ならではの意見を柔軟に取り入れて下さり、多彩なバックグラウンドを持った皆さんと働く中で、自分の強みや弱みを知ることができ、とても刺激的な1年間を過ごすことができた。

また昨年の夏には、PHJの活動地の一つである、インドネシアのセラン県ティルタヤサ自治区を訪問させていただき、母子保健教育活動の様子を視察したり、村のお母さん達に話を伺ったりした。現地の空気を肌で感じ、現地の声によく耳を傾けることがいかに大切なことかを実感し、より一層自分の仕事に責任と誇りを感じる貴重な経験をした。

インターンを始める以前は、国際協力に携わる仕事に就きたいという漠然とした夢しか持てずに悩んでいた。

しかし一年間、たくさんの方が複雑に絡み合っている母子保健問題と向き合えたことで、新たに目標を持つことができたのである。

幼い頃から父に言われていた言葉がある。「目の前にあることを一生懸命頑張っていれば自然と道はひらかれるから、あまり先のことは考えすぎなくても良い。」と。その意味がようやく分かった気がした。目の前にある課題に真摯に向き合い、チャレンジすることが大切で、そのような小さなことから運がひらけ、どんなに短い出会いから、新しい道が見つかるか分からない。小さくも大きな出会いの連続により今の自分がいると痛感している。私の新しい道をひらいて下さった方々に恩返しができるよう、自分にしかできない国際協力を探し続けていきたい。



2014年7月のイベント
筆者は後列右から4人目

「アジアのおはなしカレンダー2015」募金と年末募金の報告

2014年9月末に募金を開始し、皆様の温かいご支援とご協力により、2015年1月末までに、年末募金と合わせて352万円が集まりました。

「アジアのおはなしカレンダー」シリーズは5年目となる2015年版で終わりました。2016年版のカレンダーは「動物の親子」をテーマに、カンボジア・タイ・武蔵野市の子供達が描いた絵を中心に制作する予定です。どうぞお楽しみに。



「いたづらウサギのチュローチュ」のおはなしを描くカンボジアの子供達



「馬の顔をした姫」のおはなしを描くタイの子供

PHJのスタッフ紹介

2015年3月2日付で二人のスタッフが加わりました。



たむら いくこ
田村 郁子 (海外事業部)

昨年末で23年勤めた会社を辞め、この3月からPHJに入りました。これまで社内外で長い間様々なボランティア活動をしておりまして、PHJ内にも何人か知り合いがいて頼もしいです。海外事業部で近々事業開始予定のキャンペーン事務所を日本からサポートします。自分の小さな活動がPHJのアジアでの大きな活動に繋がることを願っています。



ながさき あつこ
長崎 昌子 (広報室)

国際協力や寄付関連の事業に関心があり、3月よりPHJで仕事をさせていただくことになりました。前職はwebコンテンツの企画や編集をしていましたが、PHJでは広報に関わることになりました。より多くの方にPHJの活動を知っていただくために尽力できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

お知らせ

*ホープジャパンニュースを郵送でなく、PDFでお受け取りになりたい方は info@ph-japan.org までお申し込みください。次号よりメールに添付してお送りいたします。